

若者はなぜ「自由な選択」の前で 立ち尽くすのか

——「仕事」が結ぶ大人－若者関係の変容——

山口 美和

「自分で判断してみるがいい。お前と、あるときお前に問いを発した悪魔と、いったいどちらが正しかったか？第一の問いを思い出すのだ……《お前は世の中に出て行こうと望んで、自由の約束とやらを土産に、手ぶらで行こうとしている。ところが人間たちはもともと単純で、生れつき無作法なため、その約束の意味を理解することもできず、もっぱら恐れ、こわがっている始末だ。なぜなら、人間と人間社会にとって、自由ほど堪えがたいものは、いまだかつて何一つなかったからなのだ！……この石ころをパンに変えてみるがいい、そうすれば人類は感謝に満ちた従順な羊の群れのように、お前のあとについて走り出すことだろう。もっとも、お前が手を引っ込めて、彼らにパンを与えるのをやめはせぬかと、永久に震えおのきなながらではあるがね」ところがお前は人間から自由を奪うことを望まず、この提案をしりぞけた。服従がパンで買われたものなら、何の自由があるのか、と判断したからだ。お前は、人はパンのみにて生きるにあらず、と反駁した。

……《パン》を認めていれば、お前は、個人たると全人類たるを問わずすべての人間に共通する永遠の悩みに答えることになったはずだった。その悩みとは、《だれの前にひれ伏すべきか？》ということにほかならない。自由の身でありつづけることになった人間にとって、ひれ伏すべき対象を一刻も早く探しだすことくらい、絶え間ない厄介な苦労はないからな。」¹

(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』第5編「大審問官」より)

1. 問題の所在——進路選択の「自由」について

「将来何になりたいか」

こう誰かに問われたら、現代の子どもや若者たちは、恐らく迷いなくその問いを「自分の心に」尋ねるだろう。私は何をしたいのか、私にはどんな職業が向いているのだろうか、と。仕事も大学も、自分で選ぶのが当たり前の時代である。家業が魚屋だから、大工だから、それを子が継がなけ

ればならないといった親や親戚からの圧力は、以前に比べ少なくなってきた。自分の意志と努力さえあれば——場合によっては少しばかりの運と才能と財力も必要かもしれないが——何者にでもなれるという状況は、昔に比べればこの上なく「自由」で恵まれた状況と映るかもしれない。

しかし、このような社会状況の中で、自分自身が本当は何をしたいと望んでいるのかわからなくなり、果てしない「自分探し」の旅を続ける若者が増えている。何を選択しようとすべて自分自身に任されている、という状況が、かえって彼らを底なしの「自分探し」へと追いたてるのである。彼らには選択・決定の「自由」が与えられるとともに、その選択に伴って生じる結果に対する「責任」を負う義務が生じるからである。もし選択を誤っても、誰のせいにもできない。すべての責任を自分で背負わなければならないことにおのきながら享受する「自由」。この「自由」の中で、彼らは探し続け、迷い続け、最終的な決定を下してしまうことができずにいる。

あらゆる情報を集めて志望する大学を決め、第一希望の企業に就職できた者でも、現実の学生生活、社会人生活に幻滅を感じると、「自分が求めていたものはこんなものではないのではないか」という思いが頭をもたげはじめる。では、「こんなもの」ではなくて何を求めているのか？明確な答えはみつからない。ただ、此処以外のどこかに、もっと自分を生かせる別の選択肢があるのではないかという思いにとらわれ、どうしようもない不安と焦燥感に襲われるのである。

若者の「自分探し」を、「^{アイデンティティ}自我同一性の形成過程」と見るとするならば、この現象はここ数年にかぎってみられる特異的な出来事ではない。エリクソンによれば、近代的自我は「自分とは何か？」という問いに対する答えを探しながら成熟していくものである。とりわけ青年期には「同一性拡散」の危機が訪れると言われている。未だ自我同一性が形成されておらず、他者とのかわりを通じて自分らしさを形作っていく時期こそ、「(支払)猶予期間」としての青年期である。青年は、このモラトリアム期間を通して、本当に「信頼しうる人間や観念」を求め、それらを自分自身の人生の導き

としつつ、共同体や集団の中での役割を遂行し、自分を価値ある者として認められることによって、自我同一性を獲得していくとされている。このような近代的なアイデンティティ形成のプロセスとしての「自分探し」には、所属する職業集団の中で、仕事を通じて自分とは何者であるかを理解していく「職業的同一性 (Occupational Identity)」の獲得も含まれてくる。職業的アイデンティティも含め、自我同一性の感覚を得るためには、本来、共同体や所属集団内の他者からの承認が欠かせないのである²。

ところが、現代の若者の「自分探し」は、もっと内向的である。就職活動に伴う自己分析などの作業を見れば明らかなように、彼らのまなざしは、徹底的に自分の「内側」に向けられている。そして、親や教師など身近にいる大人の所属する共同体にはむしろ背を向け、「自分だけが持つ価値」や「自分らしさ」の発揮できる職場を求めてさまようという特性がある。上述したような近代的自我の形成過程とは異なり、彼らの「自分探し」のプロセスには、自分以外は登場しない。身近な大人をモデルとして自分自身の将来を重ね合わせることもなく、共同体の中で他者から承認される役割を果たすことに喜びを見出すわけでもない。自分の心のみに問う「自分探し」を続けるのだ。

本稿の目的は、現代社会における若者の「自分探し」の背景の解明を試みることである。「自分探し」は、主体が他者の影響から「自由」で「自立的」であることを強迫的に求める現代の傾向と、根底で結びついているのではないだろうか。この思いには、「オリジナルな自己」への幻想が存しているのではないか。本稿では、進学や就職といった人生の選択に際して、現代の若者やその親がどのような態度をとっているのかを概観したのち、子どもが「一人前」になっていくプロセスにおいて、他者がどのように関与しうるのかを検討する。続いて、ルネ・ジラルルの欲望論を援用しつつ、他者への《嫉妬》と《憧れ》という視点から、事態を読み解くことを試みよう。

2. 進路選択に対する若者の意識

(1) 保護者の意識とのすれ

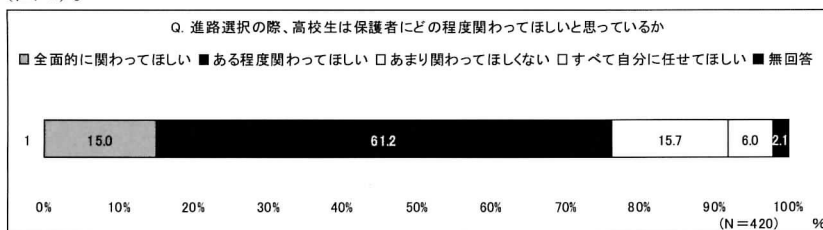
現代のわが国において、就職や進学といった人生の選択を迫られる機会に、選択する本人とその親は、どのような考えを持って臨んでいるのだろうか？

2003年に、社団法人全国高等学校PTA連合会とリクルートが合同で行った、全国の高校生とその親を対象とした調査³の結果を見てみよう。

進学に対してどのような価値観のもとに大学・短大を選んでいるのかを高校生にたずねたところ、「自分のやりたいことができる学校に進学したい」「自分の個性や能力を生かせる学校に進学したい」という項目について肯定的な回答をした高校生が9割を超える（前者は「とてもそう思う」「まあそう思う」を合わせ95.3%、後者は同91.6%）。保護者に対する同様の質問に対しても、「本人の個性や能力を生かせる学校に進学してほしい」（同94.9%）、「本人のやりたいことができる学校に進学してほしい」（同93.2%）と、ほぼ同じ回答結果が得られている。

この結果には、本人にとってもその保護者にとっても、本人が何をしたいと思っているかが、進学先を決める際の最も重要なファクターとなっていることが示されている。しかし、実際の選択にあたっては、両者の意識のあいだにずれがあるようである。

高校生の多くは、進路選択に際して親の積極的な関与を求める傾向がある。進路選択の際、保護者にどの程度関わってほしいと思っているかを尋ねたところ、「全面的に関わってほしい」と思っている高校生の割合が15.0%、「ある程度関わってほしい」と思っている高校生の割合が61.2%であった（図1）。



【図1】 高校生は保護者にどの程度関わってほしいと思っているか

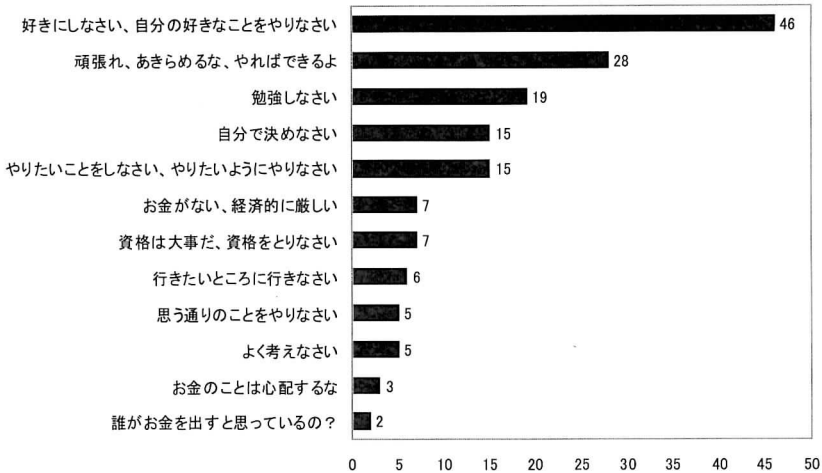
その理由を尋ねると、「自分だけじゃ不安だから」「迷ったときに助けてほしいから」「親のサポートがないと、まだ経済的にも精神的にもやっていけないから」等、自分ひとりで進路を決定することへの不安を挙げる者が多くみられる。

また、進路のことを考えるとき、「自分がどうなってしまうのか不安になる」という高校生の割合は、「自分の可能性が広がるようで楽しい」と答えた高校生の割合(34.5%)を10ポイントちかくも上回る44.0%である。半数ちかくの高校生が、自分の将来が見えないことに不安を抱えている。自由記述には、「この先、自分の考えている道に進んでもどうなるのか想像もつかず不安だ」「間違った選択をしているような気がする」「進学したとしても、その先どうしたらいいかわからない」「本当に自分がその道に進みたいのか、わからなくなるときがある」「やりたいことがみつからない」といった回答が並ぶ。ここからは、将来の自分の姿を具体的に思い描くことができないために、選択に迷っている姿が伺える。彼らは、自分の将来を決める重大な選択を自分の力で行わねばならないことに躊躇を覚え、身近にいる大人のサポートを求めているといえる。

これに対して、進路決定に対する親のスタンスは「子どもの進路が決まるまでじっくり見守ってやろうと思う」(71.1%)、「子どもの主体性を尊重したいので、子どもに任せている」(62.0%)と、あくまで子ども任せの姿勢が目立つ。

また、「進路について話すとき、保護者がよく使う言葉は？」(自由記述)という質問に対しては、「好きにきなさい、自分の好きなことをやりなさい」「頑張れ、あきらめるな、やればできるよ」「やりたいことをしなさい、やりたいようにやりなさい」「自分で決めなさい」「行きたいところに行きなさい」「思うとおりのことをやりなさい」「よく考えなさい」などの回答が並んでいる(図2)。

Q. 進路について話すとき、保護者がよく使う言葉は(自由記述より)



【図2 保護者がよく使うことば】

この結果からは、子どもがどんな進路を選択しようと、基本的に本人の自由に任せるという親の態度が伺える。子どもの選択に対して親が否定的な態度をとるのは経済的理由があるときなどに限られており、現代の日本においては、親が少なくとも態度の上で、進学・就職における子どもの「自己決定」を阻害することは少ないと推測される。

反対に、「好きなことをせよ」「やりたいようにやれ」「思うとおりにやれ」といったメッセージは、親から子へ向けて頻繁に発せられている。親たちは、進路の方向性についてほとんど口出しや指示をせず、子どもの「自由」や「主体性」を尊重して、背後から子どもを見守っているといえよう。

ここに、将来を決める岐路に立ったときに子どもが求めているものと、保護者との意識のあいだのずれが見出せる。親は、子どもに最大限の「自由」を与え、「主体的」に人生を選び取ってほしいと願っている。しかし、子どもにとっては何よりも、その「自由」が重く苦しいものを感じられているのである。なんでも好きなようにしてよい、と「自由」を与えられる

よりも、親からの具体的な指示や助言がほしい。少なくとも半数程度の高校生からは、そんなホンネがきこえそうである。

(2) 身近な人の職業に魅力を感じない若者

ところで、ここにもうひとつ興味深い調査結果がある。

同じ調査で高校生に、「なりたくない職業」について尋ねたところ、男子では「サラリーマン」「教師」「土木業・建設業」が上位3位を占め、女子では「教師」「フリーター」「看護師」がワースト3であった。また、上位10位までには、「営業」「接客」「事務・経理」「販売職・スーパー店員」「製造」などがランクインしている。フリーターは別として、これらは、高校生の保護者の多くが従事していると思われる職業名である⁴。また、保護者と並んで最も身近にいる大人である「教師」は、男女合わせた「なりたくない職業」のトップとなっている。

この調査のわずか3年前に行われた職種イメージ調査においては、「なりたくない職業」のトップは「政治家」であった。「政治家」は、高校生の日常の現実から遠い世界の職業である。マスコミを通じて付与されたマイナスイメージもあり、高校生にとって「政治家」という職業が現実味のない選択肢に見えることは容易に想像できる。

しかし、この2003年の調査では、サラリーマンや教師など、より身近に思える職種に対して、高校生が強いマイナスイメージを持つようになっているのである。その職に就きたくない理由をたずねてみると、サラリーマンやOLに対しては、「平凡な暮らしはしたくないから」「毎日同じ仕事をするより、毎日少しでも違う感じで生活したいから」「退屈そう」「魅力が感じられない」「毎日がつまらなそう」といった否定的な意見が並ぶ。また、教師に対しては、「小・中・高と先生を見ていて苦労しかしてないように見えるから」「大変そうだから」「生徒の嫌われ者だから」という理由が挙がっている。彼らは、親や教師など身近な社会人の姿を見て、こうした実感を持っているのである。

つまり彼らの目には、身近にいる大人たちが魅力的に見えていないとい

うことである。将来に対するイメージが具体的な像を結ばない中で、彼らにとってただひとつだけはっきりしているのは、自分の親や教師のようにはなりたくない、ということなのだ。

3. 大人－子ども関係の伝統的形態

こうした若者の意識からは、大人に対するまなざしの変化を読み取ることができる。現代の若者にとって、大人はもはや、自分の将来の姿を重ね合わせる対象ではなくなっている。そうだとすれば、現代の若者や子どもが身近な大人と結ぶ関係のありようは、決定的な変化を被っているのではないだろうか。

現代社会における関係を分析する前に、過去の大人－子ども関係がいかなるものであったのかを確認しておこう。ここでは、伝統的社会における大人－子ども（若者）関係のあり方を、親方－弟子関係の分析を中心として検討してみよう。

(1) 共同体において「一人前」になるプロセス

かつては、若者が共同体の中で認められるためには、職業的に「一人前」にならなければならなかった。「一人前」になるまでのプロセスは、職業によってさまざまであるが、共通しているのは、身近な大人を手本としていたことである。

日本の農村においては、子どもたちも農業に従事する重要な労働力であった。小さな頃から、大人に混じって見様見真似で田植えなどの手伝いをしていくうちに、作業の手順やコツを覚え、どのような時期に種を蒔くべきかなど収穫に直結する高度な判断が徐々にできるようになっていく。また、商人や職人の世界で「一人前」になるためには一定期間の徒弟修業が必要であり、丁稚奉公から見習い修業を通して、その世界で必要とされる技能を身に付けていくものであった。その際にも、親方や番頭など、その世界における先達となる大人が直接の手本となった。

職業集団の中で修業をしながら、若者が「一人前」になっていくプロセ

スの中で、大人は「師」としての役割を果たしていた。年季の入った手仕事の技を持つ親方や兄弟子たちの姿は、その世界への新参者である若者にとって、自分の将来の姿を重ね合わせる対象となった。修業を続ければ、いつか自分にもあのような高度な技術を身に付けられるかもしれないという期待は、親方の生きられた身体に接することを通じて、若者たちに実感されていた。

さらに、どんなに半人前で未熟であろうと、いったん徒弟となることを許されたなら、若者たちはその職業共同体の一員として認められ、その仕事の世界に直接に参加しているということを身を持って感じることができた。料理人の世界では、新参者は皿洗いや鍋磨きから修業がはじまるが、食材も触らせてもらえない段階の新人徒弟の仕事にもきちんと意味があり、職場の中でそれなりの役割を果たしている。自分が磨いた鍋を使って兄弟子が出汁をとり、清潔な皿に盛り付けられた料理が客に出されるとき、新人の働きは報われるのだ。

こうして、若者たちは直接的にその共同体の活動に参加しながら、仕事の内容を覚え、その仕事ならではの高度な判断が下される文脈を理解するようになっていく。こうした学習形態を、レイヴとウエンガーは「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation :LPP)と呼ぶ。伝統的な手仕事の世界もひとつの実践共同体 (community of practice) であり、学習者はこの共同体に参加しながら、その参加の度合いを徐々に高め、共同体の社会文化的実践への十全的参加 (full participation) へと移行するプロセスで、知識や技能を修得していくのである。

重要なことは、他の多くの共同体の構成員がともに同時に実践に参加することによって、その場における状況がその都度作りかえられていくということである。共同体のメンバーは、固定された役割をいつも同じように果たすわけではなく、状況に応じてその都度かたちを変える実践において、参与の度合いや仕方を少しずつ変えていくのである。「変わり続ける参加の位置と見方こそが、行為者の学習の軌道 (trajectories) であり、発達するアイデンティティであり、また成員性の形態でもある (傍点原文)」⁵。

共同体全体の中で自分の役割を理解しながら実践に参加することにより、他の成員から認められる。共同体への参加者は、他者からの承認を通じて自己が何者であるかという問いへの答えを得ることができたのである。

(2) 《憧れ》が牽引する親方－弟子関係

現代の我が国においても、大工や指物師といった手先の高度な技術を必要とする職業から、陶磁器、漆器といった伝統工芸の世界、さらには落語家や狂言師などの伝統芸能の世界にいたるまで、さまざまな職種において徒弟修業による技能の伝達が行われている。こうした徒弟修業における大人と若者との関係、言い換えれば「親方」と「弟子」との関係はどのようなになっているのだろうか？

弟子は、その仕事の達人である親方（マイスター）のもとでの修行を志願して、弟子入りを許可された者である。弟子は、親方の技能に魅了され、ぜひともその親方から直接の指導を受けたいと思って入門してくる場合が多い。親方に対する強い《憧れ》が、弟子の長い修業生活の原動力となる。

弟子入りを許されても、当分のあいだは仕事の主要な部分に触れさせてもらえない日々が続く。料理人の場合は皿洗いから、落語家や大工の場合は掃除洗濯といった雑用を担当する住み込みでの年季奉公からはじめ、相当の期間を過ごさねばならない。親方は複数の弟子を抱えている場合が多いため、新入りの徒弟は、たくさんの兄弟子たちに囲まれている親方に近寄って話をするすらなかなかできない。親方に少しでも近づくためには、兄弟子たちがしてきたように、一步一步階段を上るように与えられた役割をこなし、認められていくしかない。新入りの弟子にとって、親方との距離はかぎりなく遠いものに思われる。

修業を重ね、すでに立派な職人となった弟子にとっても、親方は依然、偉大な存在のままにとどまる。どんなに修業を重ね技能を磨いても、親方の作品と比べ、自分の作品には何かが欠けているという思いを多くの弟子は味わう。背中を追えば追うほど自分から遠ざかっていき、追いつきそうに追いつけない、決して手が届かない存在。弟子にとって親方とはそうい

う存在である⁶。

弟子にとって、本来その世界で生きていくために必要なのは、技能的に熟達することのみのはずである。しかし、彼らはたんに通用する技能を身につけることだけを願うわけではなく、尊敬する親方に少しでも認められるために、親方の振る舞いから仕事に対する考え方や態度に至るまで、あらゆる面から学び、それを模倣しようと努力する。それゆえ、「一人前になる」とは、目に見える技を身につけることだけでなく、人格的にも先達者に近づくことを意味するのである。

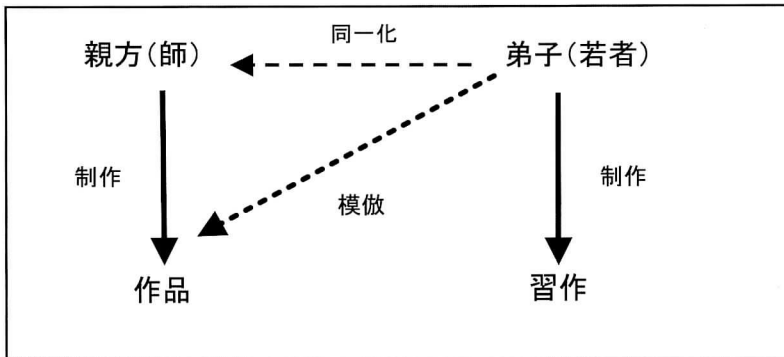
(3) 欲望の「外的媒介」関係

親方と弟子とが、ひとつの仕事を通じて結びつきあう関係を、ルネ・ジラルルの「三角形的欲望」の議論を手がかりにして読み解いてみよう。

ジラルルは、セルバンテスの『ドン・キホーテ』の中に、尊敬する他者を媒介として、主体の欲望が掻き立てられる構造を見出している。ドン・キホーテはスペインの騎士物語に感銘を受け、その主人公アマディースに深い尊敬の念を抱く。アマディースはドン・キホーテにとって、騎士道の生活の手本となる理想の人物である。そこで、彼はアマディースに自らを重ね合わせ、物語に描かれた行動のひとつひとつを模倣する。アマディースのようになりたいと願う彼の思いは、アマディースが所有するものや欲するものと同じものを手に入れようとする欲望へと結実していく。ドン・キホーテは、自ら欲望の対象を選ぶのではなく、アマディースが欲するものをのみ欲望するのである。

ドン・キホーテは、アマディースの眼を通して世界を見ているのであるが、この構造は、弟子と親方との関係にもあてはまる。弟子は、生涯親方に尊敬を抱き続けながら修業を続ける。弟子が、仕事（創作活動）に対して注ぐ情熱は、少しでもよい作品を作り出したいという欲望から生じている。弟子がめざす「よい作品」とは、まずは親方に認めてもらえるような作品、親方の弟子として恥ずかしくない作品のことである。尊敬する親方の手仕事を見て学ぼううちに、弟子は、自分自身の将来の姿を親方に重ね合

わせ（＝同一化）、親方が仕事に対して注ぐまなざしを、自らの中に内面化していく。親方のまなざしを内面化した弟子は、親方の仕事を模倣しながら習作を重ね、自分の作品の出来不出来を厳しい眼で評価するようになる（図3）。



【図3 René Girard の「三角形的欲望論」による師弟関係】⁷

弟子を主体とすれば、主体の欲望は主体自身の内面から湧き出てくるものではなく、主体が模倣する他者（親方）の関心が向かう先にあるものから発してくる。親方とはいえば、制作にあたって、弟子に直接何かを教えるわけではなく、ただ作品と向き合い、自らの制作に納得いくまで励むだけである。その親方の姿に接するうちに、弟子は親方の作品に深く魅了されるようになっていく。というのも、尊敬する親方がそれほどまでに情熱を傾ける対象（作品）が、弟子にとっては特別な光を放つものと感じられるからである。たとえば有田焼の世界において、柿右衛門は誰よりも濁手の乳白色の地と鮮やかな赤に魅せられてきた者である。代々の柿右衛門は、あの独特の美しい柿色を出すために、釉薬の配合を変えたり、さまざまな図柄を試したりしてきたであろう。その背中を見て育つ弟子は、親方が焼き物に注ぐ欲望の強さを肌で感じ、親方のまなざしの先にあるものを、自ら作り出したいと欲するようになる。親方自身がその世界に深く魅了され、そのものの虜になっている姿が、弟子の欲望をも掻き立てるのである。こ

うして、弟子は仕事において親方と同じものを欲望しつつ、試行錯誤を繰り返す。この絶え間ない試行錯誤の運動の中で、弟子は仕事を通じた自分のアイデンティティを獲得していくのである。

このように、主体とともに欲望の対象に向かっている人物、正確に言えば主体がその欲望を模倣している人物を、ジラールは「欲望の媒体」と呼ぶ。媒体を模倣する者は、自己自身による欲望ではなく「他者による欲望」を借用する。それも「自己自身であろうとする意志と完全に混同してしまうほど根源的で自発的な心理運動」⁸によって、欲望するのである。主体は手本である「欲望の媒体」に対して強い《尊敬》や《憧れ》を抱く。媒体に対する《憧れ》が主体を衝き動かしているとき、欲望の媒体は、主体にとって神にも近い遥かな高みに達する存在となる。両者のあいだには踏み越えられない絶対的な心理的距離がある。このような媒介関係をジラールは「外的媒介」と呼ぶ。

つまり、「外的媒介」関係とは、いわば「超越的な他者」が模倣のモデルとなる関係であるといえる。「超越的な他者」と言っても、相手が文字通り神とか神話上の人物である必要はない。主体が、模倣する相手の中に、自分には決して手の届かない超越性を見出せるかどうかということが決定的なのである。この点で、弟子にとって親方は、超越的な欲望の媒体であるといえよう。

4. オリジナルな自己という幻想

一方、今日の若者と大人との関係は、どのようになっているのだろうか。

彼らは、身近な大人が仕事に向かう姿に対して、《尊敬》や《憧れ》を感じてはいない。むしろ仕事をしている具体的な大人の姿は、いままさに将来の進路を決定しようとしている現代の若者にとって「あのようにはなりたくない」という反面教師の役割を果たしているのである。なぜこのような反転が生じたのか。

誤解のないように注意を促しておこう。本稿では現代の若者たちが、「大人が仕事に向かう姿に《憧れ》を感じていない」という事実と、「大人と

いう存在一般を《尊敬》できない／しない」ということとを区別する。本稿で取り上げるのは前者の問いである。

問題を後者のように捉えると、事態はたんに目上の者を敬う謙虚さに欠けた最近の若者の「道徳心」の低さの問題へと還元されてしまう恐れがある。あるいは反対に、「最近の大人が若者から尊敬されるに値しない人間に成り下がったためだ」、と大人の態度に原因を求めるのも同じことである。「最近の若者」「最近の大人」といった言説の根拠を問わないまま、両者を単純に対立させるこのような見方は、そもそもの問題の本質を見えにくくしてしまうと同時に、原因をどちらか一方に帰することによって、両者のあいだに生起する「関係性」について考えることを棚上げしてしまう。

前者の問いをきっかけに、われわれがここで問題にしようとしていることは、仕事を持つということが、若者と大人の「あいだ」において、どのように立ち現れているのか、ということである。この中に、若者が「自分探し」に没頭することの手がかりが隠されているかもしれない。

本節では、この問題を二つの方向性から論じることしよう。

(1) 《嫉妬》に媒介される親－子関係

現代の親たちの多くが、子どもの進路選択に際して「子どもの主体性を尊重したい」と考えていることを指摘しておいた。一昔前までは、親は子どもに対して絶大な権力を持っていたし、進路選択に際しても親の影響力は大きかった。これに対して現代の親たちは、子どもを「支配」するような言動を極力避けているように思われる。最近では、子どもと友人のように接する「友達親子」という関係も登場してきた。こうした傾向は、親と子のあいだに厳然と存在していた上下関係が、限りなく無化されようとしている事実を示している。ということは、親が子どもにとって超えがたい存在として、すなわち「超越的な他者」として顕現することがなくなったということなのではないか。

大澤は、その社会において人々に受け入れられる「超越的な他者」の存在様態が現代においては不可視化していることを指摘する。大澤が「第三

者の審級」⁹と呼ぶ、そのまなざしのありかが不在であることは、どういうことをさすのだろうか？

子どもにとって、かつて親は絶対的な権威であり、親のまなざしに見つめられているという意識が規範を形成していた。この関係は、先に述べた師のまなざしを内面化して制作に励む弟子の修行と、構造を同じくしている。しかし現代の親は、こうした超越的なまなざしの地位にはいない。親は、子どもにとっての規範の参照点として自らを提示することをやめたのである。このことは、さまざまな価値を一元的なまなざしのもとに裁定するメタレベルの位置に立つ者が、不在となったということを意味する。

これは、親－子関係にかぎってみられる現象ではなく、実は社会全体に共通の価値が存在しなくなったことの現われなのだ。伝統的な規範が崩壊した結果、人々の自由の範囲が拡大し、価値が多様化した。価値をはかる共通の尺度がない以上、どのような価値も権利上同等でありうる。

自分と同じ地位へと転落した大人は、子どもにとってどのような存在となるのか。ジラールは、「三角形的欲望」が形成するもうひとつの媒介関係を挙げる。それは、主体と媒体とのあいだに、上下の心理的距離が存在しない場合に生じる「内的媒介」関係である。この関係においては、主体と媒体との距離が近いために、両者が直接の影響を与えあう。両者のあいだには《憧れ》ではなく、《嫉妬》とも呼ぶべき感情が生まれる。親が子どもと立場上同等であるなら、子どもにとって文字通りのライバルとなるのだ。というのも、ジラールに従えば、内的媒介関係においては、主体が欲望するものを媒体がすでに所有しているということが起こるからである。

たとえば、子ども（主体）にとっての欲望の媒体である親は、職業と社会的な地位を手にして、それなりに安定した生活を送っている。将来に悩む子どもにとって、職業的安定を確立している親は、羨望とも呼ぶべき感情を掻きたてる者となるであろう。加えて、現代の親は、子どもにとって超越的な他者として振舞う者、つまり「第三者の審級」の地位に立つ者ではなくなってしまった。親は、時間的に先に生まれたというだけで、自分

と根本的に同等の存在者でしかない——このように感じられるとき、職業的安定をいまだ所有していない子どもは、それをすでに所有している者を《嫉妬》する。職業的安定という点において自分より先行している親に、自分の価値を認めさせるためにはどうしたらよいか。親よりも社会的ステータスの高い職業や、特殊な能力を必要とするような職業を手に入ればよいのである。このようにして若者は、親の就いている職業を、できるだけ「なりたくない職業」とみなし、自分が実は《嫉妬》している相手（親）の地位を相対的に貶めることで、自己のアイデンティティを辛うじて確保しようとするのではないか。

さらに、親たちが「自分らしくやりたいことをやりなさい」というメッセージをくり返し発していたことを思い起こそう。このメッセージには、他人の意見に従ったり、誰かを模倣したりせず、自分だけのオリジナルなよさを追求して将来を決定せよ、という命令が含まれている。子どもはここから、「模倣の禁止」という裏のメッセージを読みとる。

さて、アイデンティティの確立には、心から信頼できる他者というモデルが必要であることは本稿の冒頭で述べた。「模倣の禁止」というメッセージを受け取った若者たちは、信頼できる他者に自分を重ね合わせて、将来の自己像を思い描くことが困難になる。先に、子どもが親に対して抱く《嫉妬》について述べたが、《嫉妬》という関係もまた、実はその相手に深く魅了されているからこそ成立する関係である。知らず知らずのうちに、子どもと親の嗜好が似通ってくることはよくあるように、子どもは、たとえ親に《嫉妬》していようと、親をどこかで模倣してもいるのである。

ところが進路選択という重要な決定のときに、親からそれとは正反対のメッセージを受け取る若者たちは、苦しむことになる。現代の親たちは、子どもとの距離を近くとりすぎるために、《嫉妬》というかたちでの模倣への欲望を掻き立て、いわば身振りで子どもを誘惑する。しかし他方では、子どもの自己決定を尊重する理解ある親という役割も演じようとする。その結果、決して誰の模倣もするなという矛盾する命令を発して、子どもをダブルバインド状態に追い込んでしまうのではないか。

このような状況において仕事を選ぶことは、子どもにとって困難な課題である。若者は身近な大人に対して、屈折した態度をとらざるをえない。重要な決定に際して、本心では親に力になってほしいと願うと同時に、親のようにはなりたくない、なつてはいけないと思うようになる。他者を模倣してはならないとすれば、共同体への参与や役割遂行によって職業的アイデンティティを獲得していくことはできない。「自分とは何か?」という問いは自分の内面に向けて発せられ、その答えは、共同体とともに参与する他者の承認によって得られるのではなく、果てしない「自己分析」によってその都度「自覚」されるだけの不安定なものとなるのである。

(2) 進路選択という「リスク」

若者の「自分探し」は、職業選択が本人の「自己決定」に依拠するようになったことと、ほぼ相関的に生まれてきた現象である。だとすれば、この職業の「自己決定」、すなわち「誰にも強制されない自由な意思のもとに、主体的に決定を下す」ことが、若者にとってどのような意味を持つのが、事態を読み解く鍵なのではないだろうか。

この問題について考えるにあたり、リスク社会に関する議論が手がかりとなる。

20世紀末期以降の後期近代は、「リスク社会」と呼ばれる。リスク社会とは、ウルリッヒ・ベックによって提唱され、A. ギデンズやN. ルーマンによって引き継がれた概念で、社会的レベルから、個人的レベルまでの、さまざまなリスクの可能性にとりつかれた社会のことを指す。ところで、「リスク社会」は、後期近代になってはじめて現れた社会形態であるとされる。リスク (risk) は、日本語では「危険」と訳されるため、同じく「危険」と訳される danger との区別が難しくなってしまうが、両者は根本的に異なる概念である。リスクは、選択・決定との相関でのみ現れるような「危険」を指すからである。リスクは、ひとが何かを選択したり決定したりするときに必然的に伴う「不確実性」に関連して生じる。リスクとは、自分の決定に伴って生じると認知された不確実な損害のことなのである。

さて、このようには考えられないだろうか。現代において、職業選択が自分自身の選択・決定によって行われることとなったが故に、それは若者たちにとってひとつの「リスク」となったのではないかと。

たとえば彼らは、多様な職種の中から特定の職業を選択し、あまたの企業の中からひとつを選び出し、実際に就職する。しかし、事前に就職先に関するあらゆる情報を集め、企業体質を入念にチェックしてから入社したとしても、勤め始めた途端に、他社の不祥事のあおりを受けて会社が倒産してしまうことだってありうる。この場合、倒産という損害は予想不可能なものであるが、そもそも自分がその会社を選択したが故に被った損害であることは間違いない。

「就職」や「進学」といった人生の局面にさしかかったとき、われわれは必ず何かひとつの選択肢を「選択」しなければならない。重要なことは、どの選択肢を選んでも、必ずリスクがついて回ることである。先の例では、別の職種、たとえば医者などを選んでいれば、会社の倒産という事態には巻き込まれなかったかもしれないが、今度は感染や医療訴訟など別のリスクに曝されることになったかもしれないのだ。

現代社会は、さまざまな場面で倫理的判断を迫られる社会である。進路選択という個人的な問題もまた、ひとつの倫理的な決断である。われわれは、何かを決断するとき、できるだけ知識や情報を集めようとする。しかし、事実に対する知識をどれほど積み上げても、そこから倫理的判断を導き出すことはできない。

こうした状況を前にして、若者が学校という安定した知識の場から離れ、進路の選択を行うという「飛躍」（＝実践）へと踏み出すことに恐怖を感じるのは、当然のことといえないだろうか。

5. 「学び」と「仕事」の断絶—大人—子ども関係の靱帯の喪失

現代の若者が、仕事の世界に「参加」することは、本格的な就職をまっとはじめて可能となる。

伝統的社会の徒弟修業においては、原則として、弟子の学びの場は生活

の場と一体であった。しかし、近代の学校を中心とする教育システムにおいては、「学ぶこと」と「生活すること」とは、時間的にも空間的にも切り離されているのである。

近代以降、ひとは、身体的・精神的に成熟するまでの時間を、社会から空間的に隔離された「学校」という場所で過ごすこととなった。「学校」で過ごす期間は、大人の世界で営まれる社会文化的活動に、本当の意味では参与しない期間である¹⁰。子どもから青年になるまでの期間は、生活の糧を得るために働く義務を免除され、生きるための術をどうするかといったことに悩まされることなく、外部の世界から撤退してただひたすら「学ぶ」ことを許された「(支払) 猶予期間 (moratorium)」である。若者たちは、学校教育段階を終えるとき、はじめて、職に就いて働くということを通して、社会において自らの身体をもって生きるときがやってくるのである。

「学校」は、汎用可能な知識を効率的に学ぶことができるように作られている。教えられる内容は、社会の生きた文脈から切り離され、年齢段階ごとに配列され、一斉教授という形態によって伝達される。今日では、「学校」は青年期までの教育をほぼ独占的に行う重要な社会的システムとなっているが、人間の学習の場として考えると、歴史的に見ても非常に特殊な形態であることがわかる。レイヴとウェンガーも、「教育形態としての学校組織は、知識は脱文脈化できるという主張に基づいており、しかも学校自体は社会的制度であり、学習の場としてきわめて特殊な文脈を構成している」¹¹と指摘している。

伝統的社会では、「学び」の場は直接社会につながっている場所であった。そこでは学ぶことと働くことが渾然一体となっていたために、共同体の成員は、労働への周辺的な参加から、その職種を担うことができるほどの深い参与へと、スムーズに移行することができた。また、それ以上に重要な違いは、「知」は特定の仕事の世界に結びついた文脈の中でしか、学ばれなかったということである。「知」は、そもそも世界の生きた状況の中に埋め込まれているものであり、その文脈の中でしか意味を持たないものであった。つまり、状況に参与しない人の前には、「知」は決して浮かび

上がってはこないということである。

しかし近代以降のいわゆる「学校知」は、ダイナミックな仕事の間から切り離されて脱文脈化され、それ自体で流通し取引される「知識」となった。学校では、その世界に「参加」することなしに、その仕事に関する「知識」や「情報」のみを得ることができるのである。もちろん「知識」の集積それ自体は、学校化された現代社会の中ではそれなりに意味を持つ。しかし「仕事に関する知識」と、「仕事をするための知」とは異なる。文脈から切り離されている学校知を、仕事をする場において生き生きと駆動する「知」へと変換するには、その実践に参加し、自分の身体によって状況を生きるほかないのである。

「学校」という場所が、そもそも社会から隔離されて成立したことを考えると、そこから社会へと出て行くことが青年にとってとりわけ越え難い壁となったことは容易に想像される。多くの一般企業では、就職が決まっても、自分がどのような部門に配属されるのか入社するまでわからない。その仕事の世界において自分がどんな役割を果たすことができるのか見当がつかないまま、社会に飛び込んでいかねばならないことは、若者に大きな不安を呼び起こしても当然であろう。

かつて「仕事」は、大人－子ども（若者）関係を結ぶ靱帯であった。子どもから大人になっていくということは、仕事を通じて社会に少しずつ参与していくプロセスだったからである。

しかし、近代においては、大人と子どものあいだをつなぐのは、もはや「仕事」ではない。子どもは、仕事する大人の姿から直接的に「知」を獲得しながら大人になっていくのではなく、一定の期間、学校という場所で社会から隔離されることによって大人になる。つまり、大人と子どもは、もはや共通の世界への参与を通じて直接つながりあうことはなく、学校と社会とを分かつ「空隙」をあいだにはさんで、接触なしに向き合う関係となったのである。大人から見れば、子どもが暮らす「学校」という世界は、社会とは切り離されたものに見えるであろう。その裏返しで、子どもから見れば大人は、子どもの現実とは接点のない、「あちら側」の世界で生きて

いると感じられているのではないか。

こうした状況の中で現代の若者は、働く大人の姿に、将来の自分を重ね合わせる事が難しくなったのだといえよう。

【註】

- 1 ドストエフスキー著、原卓也訳『カラマーゾフの兄弟（上）』新潮文庫、1978年、485-488ページ。
- 2 E.H. エリクソン著、岩瀬庸理訳『主体性（アイデンティティ）青年と危機』北望社、1969年。
- 3 社団法人全国高等学校PTA連合会 株式会社リクルート「キャリアガイダンス」合同調査「高校生と保護者の進路に関する意識調査」（2003年）。平成15年7月に全国の高校3年生を持つ保護者とその子ども2000組を対象として行われた質問紙調査（郵送法）。回収数（回収率）は、高校生496人（24.8%）、保護者394人（19.7%）である。
<http://www.recruit.jp/library/school/S20031020/docfile.pdf#search='将来の夢%20調査'>
- 4 ちなみに、この調査の対象者である保護者の職業分布は、会社員（営業、販売、サービス業）が22.5%、会社員（企画、人事、経理ほか事務系職種）が5.8%、会社員（技術、開発、専門職）が12.6%、会社員（その他）が10.2%、公務員・教員・団体職員が18.7%などとなっている。
- 5 ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書、1993年、11ページ。
- 6 たとえば、陶芸の世界での「柿右衛門」や、落語における「文楽」「小さん」のように、名人と呼ばれる親方の名前は、弟子に代々引き継がれていく。襲名した弟子は、たしかに親方と同じ名人の名前を手にするのだが、それによって親方に追いついたという感覚を抱くことは稀である。というのも、弟子が次の代の名前を襲名するときは、多くの場合、親方が死ぬときであり、死によって親方の名声はかえって不動のものとなるからである。
- 7 山口恒夫『『師弟関係モデル』から『省察的実践家の育成モデル』へー医学教育の転換』『医学教育』vol.38.No.3、2007年、163ページ。
- 8 ルネ・ジラール著、古田幸男訳『欲望の現象学』法政大学出版局、1971年、3ページ。

- 9 大澤の「第三者の審級」という概念については、大澤真幸『戦後の思想空間』筑摩書房、2004 年、または、大澤「〈公共性〉の条件 自由と開放をいかにして両立させるのか」『思想』vol.942, 944, 946, 947 を参照。
- 10 たしかに、近年、中学校や高校におけるキャリア教育のカリキュラムの中でも、職場体験など体験学習の場は用意されるようになってきた。しかし、それはあくまで擬似的な体験にとどまる。
- 11 レイヴ、ウェンガー、『状況に埋め込まれた学習』16 ページ

【参考文献】

- 石川准『アイデンティティ・ゲーム—存在証明の社会学』新評論、1992 年
- 熊沢誠『若者が働くとき—「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房、2006 年
- 上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、2005 年
- 内田樹『下流志向』講談社、2007 年
- ウルリッヒ・ベック『世界リスク社会論—テロ戦争、自然破壊』平凡社、2003 年